

ひかりっこストーリーを共に

第1回職員会資料より

2024年4月24日

園長

運営上の基本方針

1 本園の歴史と地の恵を大事に、誇りに

本園は昭和42年浅川団地の「北部愛児園」として原田要氏が開設、以来恵まれた環境と地域の協力のもと、昭和47年改築学校法人の認可を得「浅川学園ひかり幼稚園」となり、幼児教育を更に大きく前進させることになりました。広い運動場に加え長野市緑地課の緑ヶ丘公園グラウンドやテニスコートに恵まれて、春夏秋冬四季折々の野外保育が可能で、特に通年茶道・体操・英語・水泳教室等専任講師による指導を実施し、園児達は自然に親しみながら健やかに育っています（ひかり園ホームページより）。初代園長原田要氏の平和への願いと地域の皆様の熱い思いをしっかりと受け止め、地の恵を大事にし、私たちの誇りにしたいと思います。

2 安心・安全なこども園に



保護者にとって自分の命より大切な子どもさんの命をお預かりしていることに鑑み、危険個所の

点検や安全な保育方法には、細心の注意を払いましょう。保護者にとって、子は宝もの、お預かりしたままの体でお返しできるように力を合わせましょう。

子どもたちや保護者にとって、安心・安全なこども園にしていきたいと思います。

3 遊びから学ぶ 体験から学ぶ 自己肯定感を高める

(1) 保育目標に「強く」「正しく」「明るく」「優しく」が掲げられ、基本方針「子どもの力と考えを信じて待つひかり園～遊びから学ぶ 体験から学ぶ 自己肯定感を高める～」を設定しています。子どもたちのやりたい気持ちを高め、子どもたちのやりたい気持ちや発想から発した「夢中になって取り組む遊び」の環境づくりをお願いします。

【とうきょうすくわくプログラム実践報告より】

(日本教育新聞4月15日版で掲載)

「子どもたちが自ら興味を持ち、夢中になって遊び、発見する過程を積み重ねること。活動内容はあらかじめ決まっているものではなく、子どもたちの興味関心を基に自由に作り上げていく。」ことが大事。探究活動の流れ①テーマを決める②問いを考える③環境をデザインする④探究活動を実践し、記録する⑤振り返る・共有する→②から⑤の流れを繰り返していく。



(2) 安心と挑戦の循環を大事に

職員会や保護者説明会でも、話題にしましたが、アタッチメントを乳幼児期に体験させることの大切さが強調されています。アタッチメントとは、子どもが怖くて不安な時や感情が崩れたとき、それを近くにいる大人が共感的に受け止め、崩れた感情を元通りに立て直してあげることや安心感を与えてあげること（スキニップももちろん大切だが、それとは少し違う。）です。人に対する信頼感や「自分は愛してもらえる価値がある」という感覚を持つことが、自然に自分のやりたいこと、おもしろそうだというを見つけ、それに挑戦する気持ちにつながってくると思います。



4 互いの頑張りをたたえ合い、課題を明確にして、全職員が同じ方向を向いて取り組みましょう。

(1) 行事や園内での催しなど、中心になってやっていただいた先生方に、「お疲れ様」「良かったよ」など、声をかけ合ひましょう。「やって良かった」とお互いがうれしく思え、次へのやる気につながるような声がけをさらに心がけましょう。

(2) 大勢の先生方が様々な立場で働く本園です。保育活動や行事などの準備・実施の中で、それぞれの先生方が感じている事も様々です。それを出し合い、話し合つて、方向を探ることが大切かと思ひます。認識の違いや経緯が分からないためにお互いのことが理解できないこともある気がするからです。課題を明確にして、全職員が同じ方向を向いて取り組んでいくことを目指したいと思ひます。そのために昨年からお互いの事ですが、職員会の時間などに、今年も意見交換をする時間をできるだけ設けることをしたいと思ひます。お互いの考えを知ることで、同じ思いを生み、それが子どもたちの安心へとつながつて、子どもたちの豊かな人格形成につながると思ひます。

5 学ぶ気持ちを大切に・・・保育者として豊かな人生を

数ある職業の中から、私たちは保育者という職業を選びました。日々成長していく子どもたちのために何が必要かを考えることは、私たちも日々新しい自分になることでもあります。職員研修に積極的に参加することはもちろんですが、目の前の子どもたちや保護者、同僚から学ぶことが多いと思ひます。こうやったらどうか、こうするにはどうしたらよいか、という先生自らが学び追究している姿は、子どもたちの「おもしろいな」「なんだろう」という興味や関心を伸ばすことになると思ひます。また、子どもたちや保護者の言動で時には受け入れがたいと感じることもあります。そんなとき、相手の言動の理由をよく考えると自分の独りよがり気づくこともあります。特に、子どもたちの言動には、それなりの理由があり、大人の都合で不安定になっていることもあります（自分の場合です）。それに気づいたときは、こちら素直に謝ることも必要です。学ぶ気持ちを持ち、柔軟な気持ちで日々過ごし、保育者として豊かな人生を送りたいと思ひます。



6 年度当初にあたり、子どもたちとの接し方のよりどころとなる「教師十戒」を読んでみましょう。ハッとすることがあります。

「教師十戒」

毛涯章平著 『肩車にのって』より

一 子どもをこばかにするな。教師は無意識のうちに子どもを目下の者と見てしまう。子どもは、一個の人格として対等である。

二 規則や権威で、子どもを四方から塞いでしまうな。必ず一方を開けてやれ。さもないと、子どもの心が窒息し、枯渇する。

三 近くに来て、自分を取り巻く子たちの、その輪の外にいる子に目を向けてやれ。

四 ほめることばも、叱ることばも真の「愛語」であれ。愛語は、必ず子どもの心にしみる。

※「愛語」：相手の身を思いやって語ることば

五 暇をつくって、子どもと遊んでやれ。そこに本当の子どもが見えてくる。

六 成果を急ぐな。裏切られても、なお信じて待て。教育は根くらべである。

七 教師の力以上には、子どもは伸びない。精進を怠るな。

八 教師は「清明」の心を失うな。ときには、ほっとする笑いと、安堵の気持ちをおこさせる心やりを忘れるな。不機嫌、無愛想は、子どもの心を暗くする。

※「清明」：自然で明るく、ゆったりすること

九 子どもに素直にあやまれる教師であれ。過ちはこちらにもある。

十 外傷は赤チンで治る。教師が与えた心の傷は、どうやって治すつもりか。